（試訳）

十八世紀近代化版『カンタベリ物語』ウイリアム・リップスコムによる「修道僧の物語」

轟　義昭　訳

はしがき

十四世紀のイギリス詩人ジェフリー・チョーサーが書いた『カンタベリ物語』（以下、中世版と略す）は有名であるが、十八世紀近代化版『カンタベリ物語』があることをご存じだろうか。ベッィ・ボーデン（Betsy Bowden）が編集したテクストによると、ジョージ・オーグル（一七〇四―一七四六）、アンドリュー・ジャクソン（一六九五―一七七八）、ウイリアム・リップスコム（一七五四―一八四二）等による断片的な近代化版があるようだ。[注一]

私はジョン・リドゲイトの『王侯の没落』を中心に、運命の寓意研究と運命の彩飾画研究[注二]を行っているので、チョーサーの『カンタベリ物語』のなかでは、『名士列伝（デカシーブス・ヴィロールムム・イルストリウム）』を取り扱った「修道僧の物語」に興味を持っている。運命の女神の描写を中心に、中世版の邦訳［西脇順三郎（ちくま文庫）[注三]と桝井迪夫（岩波文庫）[注四]］を参照しながら、リップスコムによる近代化版「修道僧の物語」に目を通すと、中世版「修道僧の物語」とはかなり異なっていることが分かった。

(1) 行数に違いが見られる。中世版も近代化版も韻文形式であるが、七七五行からなる中世版は、近代化版では六六二行に縮小（例えば、アレクサンダーの記述は四十行から十四行、シーザーの記述は五十六行から十九行）されている。

(2) 十七人の没落した人物を紹介する順番にも違いが見られる。中世版では、ゼノビア（七番目）に続いて、スペイン王ペドロ（八番目）→キプロス王ペドロ（九番目）→ロンバルディアのベルナボ（十番目）→ピサのウゴリーノ伯（十一番目）→ネロの順序であるが、近代化版では、クロイソス（十三番目、中世版では十七番目）に続いて、スペイン王ペドロ→キプロス王ペドロ→ベルナボ・ヴィスコンティ→ピサのウゴリーノ伯（十七番目）の順序になっている。

(3) 中世の文学作品のなかでは誓言、愛用句、きまり文句が頻繁に見られ、チョーサーの「修道僧の物語」も例外ではない。[注五]

誓言：マドリアン聖人様のやんごとなきお身体にかけて（一八九二）[注六]、神様の御骨にかけて（一八九七）、御身体の骨にかけて（一九〇六）、誓って言いますが（一九二一）、本当のところ（一九二八）、あんたのご先祖にかけて（一九三一）、わたしの信仰にかけて申しますが（一九三五）、わたしのおやじの魂にかけて申しますが（一九三七）、神様にかけて（二五二二、二五二五）

愛用句：手短に言うと（二〇四五）、手短にこの物語を話しますと

（二三二一）、簡単に申し上げますと（二三五五）

きまり文句：これからわたしが申し上げますように（二七〇二）

しかしながら、近代化版にはこのような常套句は削除されている。

(4) チョーサーは、物語のなかで、

「悲劇というものは、古書によると、栄えし人がその高位から没落して、みじめな最期をとげる話をいうのです。」（一九七三―一九七七、西脇訳）

「悲劇とは運命の女神が驕れる王座を不意打ちして、これを倒す話を哭き悲しみつつ歌うものにはかならない。」（二七六一―二七六四、西脇訳）

のように、運命の女神の作用が王侯の没落に起因するという中世思想を展開した悲劇の定義を行っている。しかしながら、近代化版では「悲劇」の定義は削除されている。

(5) 最も注目すべきは、リップスコムが中世版の「修道僧の物語」に基づきながら新たに物語を創作している点にある。「序」のなかで、中世版にはない物語の改作に対する断りを述べている。

「しかし、立派な皆様方、私が英雄の没落あるいは捕虜となった君主の運命を物語る際に、期せずしてよく知られている話を想像して作ったり、年代の正確さを欠いたりすることがあっても、私の熱意を咎めないで下さい。」（八六―九〇）[注七]

従って、中世版と近代化版において内容上の相違が発生している。アダムを例に取ると、中世版では彼は「労働に駆り立てられ、地獄に落ち、不幸に陥る」けれど、近代化版では彼は「積み重なる災難の悲惨さを体験するように運命づけられ」、地獄に落ちるわけではない。

私は中世版とリップスコムによる近代化版「修道僧の物語」の違いを明確にしたいと思い、ここに訳出した次第である。訳出にあたっては、Betsy Bowden (ed.), *Eighteenth-Century Modernizations from the Canterbury Tales* (D.S. Brewer, 1991) のテクストを底本とした。人名・地名の訳出にあたっては、『リーダーズ英和辞典』（研究社）を参照した。例えば、Judith（四七二）はユデト（西脇訳と桝井訳ではジューディス）、Antiochus（四八二）はアンティオコス（西脇訳ではアンチョークス、桝井訳ではアンティオクス）のように訳した。また、必要と思われるものについては、【　】に入れて、簡単な説明を加えた。

修道僧の物語の序

メリベウスの物語が終わると、わが宿の主人は嬉しそうに言いました。「美味しいビールを一樽もらうよりも、私の親愛なる妻にも（偶然にも辛抱強く耳を傾けていたならば、）この物語を聞いてもらいたかったよ。というのは、（実を言えば）彼女は多少張り合いがちで、立派なメリベウスの奥さんとはかなり異なっているからです。

例えば、私が怒りを遷して男性使用人を殴ると、直ぐにもっと大きな重い棒を持ってきて、「この穀潰し、やつらを片っ端から虐殺し、骨を一本残らず折ってしまえ！」と叫ぶのです。また、教会で近所の人が従順に低く頭を下げて私の妻に敬意を表さなかったならば、あるいは礼儀正しい作法を欠いて無礼な態度をしようものなら、家に帰り着くやいなや、怒鳴り散らすので、私の両耳は可哀想に他人の過失のためにガーンと鳴りっぱなしです。「薄情な臆病者で卑怯者、あなたの可哀想な妻がこのような恥辱を受けても、仕返ししようとしないとは？それでも男なの？とんでもない。私の糸巻棒を受け取って、あなたの剣を私に渡しなさい。」と激怒して叫ぶのです。さらに怒りを爆発させるのです。「卑劣な卑怯者、軟弱者と結婚したなんて、何たる不運。気取り屋どもに侮辱されても、体を張って傷つけられた配偶者の権利を擁護しようとしないとは。」

妻が命じる時、彼女の多くの敵に私の身を晒さないと、このように妻は詰ります。妻が友か近所の誰かを私に殺害させる不運な日が来ることを大いに心配しています。というのも、私は大胆にも妻に逆らうことは決してないと認めますが、手に剣を持ち危険に満ちているからです。彼女に敵対してしつこく言い続ける者は哀れです。というのも、ああ！どんな丈夫な男が筋骨逞しい彼女の鉄拳による激しい報復に耐えられるというのか。だが、妻のことはこれぐらいにしましょう。次に、修道僧様、立派なお話で私たちの耳を楽しませて下さい。

そら、ロチェスター【イングランド南東部の町】の美しい尖塔が見えてきました。では、修道僧様、急いで私たちに新たな話をお聞かせ下さい。私はあなたのことを修道僧様と呼びます。というのも、お恥ずかしい話ですが、あなた様の本当の名前を知らないからです。ジョン殿とお呼びしましょうか。それともっと高貴な名前のペドロ殿と呼ばれることをお望みですか。あなたは何処の出ですか。高貴な家系の生まれですか。素性と家柄があなたの名前を引き立たせています。割腹の良いあなたのしなやかな様子、あなたの皮膚の艶から、あなたが出かけるところは何処でも、牧草地が青々と茂っているのが見て取れます。修道院では高い役職に就き、格式張った物々しさと相応しい肩書きが添えられ、あなたの恐れ多い命令を実行しようと忠実な者どもがあなたに仕えています。あなたは神聖な誓願を順守して青白くなった不慣れな修練者でも未熟な修道僧でもありません。贅沢三昧に給仕されているので、あなたの大きな身体と幅広く筋骨逞しい胸部から、あなたの体力は明白です。そのような体力の持ち主を冷たい殺風景な独居房に閉じ込める愚かで卑屈な心を持った卑劣漢に不幸あ

れ！というのも、（あなただけが敢えてした）自らの決意と主の御心を遂行するのに相応しい者があなたのほかに誰がいるというのですか。近いうちに、総大司教のように、あなたは微笑みながら多くの若枝が親木の周りに花を咲かせているのを見ることでしょう。もし私が教皇であれば、男たちは違った人生を送っていたことでしょうし、剃髪された元気の良い修道僧は皆女房を持ったことでしょう。というのも、今や神慮は不幸にも妨げられ、修道僧の一生は恋の骨折り損にすぎないからです。それゆえ、今や発育の悪い輩の俗人どもは、ひ弱に生育し、痩せて弱々しく生殖することもできない小男となり、自らの及ばない存在の鎖を広げようと、敢えて修道生活を営む割腹の良い若者どもに立ち向かうことなんて決してありません。だから、俗人の奥さん連中は憎々しく不妊を恐れ、追いつめられて聖職者たちに救いの手を求めるのです。修道僧様、私が言ったことに腹を立てないで下さい。冗談のなかにも十分に為になる多くの真実が語られているからです。」

修道僧は辛抱強く彼の冗談のすべてを聞いて、元気よく簡潔に語りました。

「喜んでお話を一ついたしましょう。それとも立派な聖エドワード【イングランド王（約一〇〇三―六六）】の偉業を喜んで聞いてくれますか。それとも、もしお望みならば、悲劇を扱った詩人の情熱のこもった労作を語りましょう。不穏な争いや人生の盛衰を生き生きと描写するのが詩人の務めです。詩人は憤慨して没落した英雄の前例のない災難を制約のない散文で物語っています。詩人の強烈な怒りは心を込めた多くの不朽の詩歌のなかに一段と見事に表れています。

しかし、立派な皆様方、私が英雄の没落あるいは捕虜となった君主の運命を物語る際に、期せずしてよく知られている話を想像して作ったり、年代の正確さを欠いたりすることがあっても、私の熱意を咎（とが）めないで下さい。このことに関して、はっきりと申し上げておきますが、あなた方の賞賛に値するよう最善を尽くす所存です。」

修道僧の物語

さあ、それでは注意してお聞き下さい。妬まれるような高い地位から転落し、至福から転落し、決して救済される見込みのない苛酷な人生の災難を耐え抜いた方々についてお話しいたします。というのも、ああ！運命の女神が進路を変える時、人間の如何なる力が気紛れな彼女の進路に立ちはだかることができるでしょうか。これから述べます実例から傲慢さを抑制され、今後、誰も彼女の見せかけの微笑みを信用されませんように！

ルシフェル

生意気さの罪による最初の犠牲者、ルシフェル【堕落した大天使】から私の物語は始まります。天使として配列された彼は天国から口を大きく開けた地獄の暗黒世界に転落しました。そこで絶え間ない時の最後の瞬間まで謀反の罪を償うように運命づけられました。

アダム

神自らの御手によって造られたアダムはエデンの楽土を気ままに徘徊し、この上なく親切で恵み深い神は、一本の樹を除いて、それぞれの素晴らしい果実を勝手に食する権限を彼に与えていました。彼は長い間至上の喜びのなかで暮らしていましたが、遂に罪に覆われた毒が彼の心をすっかり汚してしまいました。それゆえ（ああ！当然のことですが、）彼は積み重なる災難の悲惨さを体験するように運命づけられました。

サムソン

マノア【サムソンの父】の息子をご覧下さい。彼の名声はこの世に広く轟き、誕生前に神自らの天使によって告知され、神に目をかけられ、力において彼は誰よりも勝っていました。遂に、幾度となく懇願されて、彼は勇敢さを引き出す力の秘密を漏らしてしまい、愚かさの餌食になりました。

嘗て彼は唸（うな）る獅子を素手で虐殺し、胴体を裂いて四方八方に放り投げました。彼の胸は様々な悪事に対して激しい懲罰的な思いで一杯になっていましたが、妻の要求はもっぱら拒みました。彼は激怒して三百匹の狐を捕まえ、父親の黄金色に実ったトウモロコシ畑にその狐を連れて行き、復讐の念を満たすため、大胆にもそれぞれの尻尾に火のついた松明を結びつけました。そしてその畑の中に怯えた動物を追い立てて、その惨事に満足し、ものすごい眼差しを楽しませました。

千人が彼一人の手にかかって死にました。その時の彼の唯一の武器はロバの骨だけでした。大量殺戮に疲れて、激しい喉の渇きのために、膨張して鼓動する血管がもう少しで破裂するところでした。彼は熱烈に全能の神に自分を救うために元気づける水を授け給うよう祈りました。すると、大量殺戮に用いた骨の軸受けに取り付けられた、最初に生えた、歯から（これまでになく不思議なことですが、）突然、泉から湧き出すかのように、夥（おびただ）しい水が流れ出ました。士師記のなかに述べられていますように、力強い男はこの水で喉の渇きを和らげました。

彼はガザ【古代ではペリシテ人の主要都市】の城門を引き剥がし、大きな肩に載せて丘へと運びました。おお、サムソン【怪力・豪勇のイスラエルの士師】、サムソンよ、もし女性の術策があなたの従順で優しい心に効かなかったならば、結集した数千の兵力は何の其の、あなた自身の力がその軍勢を打ち負かしたことでしょう。彼は断固たる禁酒主義の中で育ち、耽溺を誘う葡萄酒の快楽を決して知りませんでした。彼の長い巻き毛は刈り込まれることなく、美しい額を引き立て、（神の思し召しにより）ここに彼の力の源がありました。ああ！彼が楽しんだ勝利の喜びは束の間でした。というのも、女性の策略があまりにも早く彼の強さを台無しにしたからでした。彼は不貞のデリラ【サムソンをペリシテ人に売り渡した娼婦】にひそひそと重要な秘密を語ると、彼女は残忍な敵に恋人を売り渡し、彼が眠っている間に、剥き出しの額から巻き毛を切りました。彼は夢から覚めるとひどく驚き、直ぐに激痛の中で、くり抜かれた目のことを嘆き悲し

みました。彼の美しい頭髪が刈り込まれていない時は、どんな力も彼を制することはできなかったし、どんな鎖も彼を縛ることはできませんでした。しかし、巻き毛を奪われ、彼はどうすることもできない捕虜となり、長い間、薄暗い場所に幽閉されました。下劣で辛辣で侮辱的な言葉を浴びせかけられながら、彼はゆっくりと碾臼（ひきうす）をひきました。おお、サムソン、サムソンよ、少し前までイスラエル民族の裁き主で、神の甘ったるい微笑みで祝福され、正義の剣をしっかりと手に持ち、力でも知恵でも誰よりも勝っていたのに！ああ、彼は如何に転落し、かつて味わったが、もはや味わうことのない喜びを、どうすることもできずに、嘆き悲しむように運命づけられたことか。というのも、サムソンの敵どもが、ダゴン【ペリシテ人が礼拝した半人半漁の神】を崇（あが）める日に、（慣習的祝祭の戯れに献じて）彼を来させ、たわいもない意外な事をして自分たちの残忍な心を満足させ、大きく開いた眼を喜ばせるようにと命じると、彼の心は憤慨して下劣な嘲りをはねつけ、膨らんだ彼の胸は義にかなった復讐の念で燃え立ち、彼は激怒して身動きできないほど込み合っている壮麗な建物を支える大きな柱を掴み、力強く抱きしめ、建物の土台からその柱をもぎ取りました。すると、凄まじい音とひどい騒音を立ててぐらつき、物凄い音を立てながらその建物は倒壊しました。語るには恐ろしいことですが、サムソン自身と敵の一団は恐ろしい恐怖感に苛まれ、その倒壊によって押し潰されて全員亡くなりました。

ヘラクレス

次の話題は高貴で名のあるアルキデース【ヘラクレスの別称】です。第二のサムソン、ことによると、同一人物かもしれません。精神力と度胸では同様に名を馳せ、それぞれの大胆な冒険において勝利の栄冠を得ました。ネメア【古代ギリシア、ペロポネソス半島北東部の谷】のライオンを倒して剥いだ皮は、苦労の末、勝利して得た最初の報酬でした。次に、恐ろしいケンタウロス【半人半馬の怪物】の一族、半身が女の怪物ハルピュイア【上半身が女で、鳥の翼と爪を持つ貪欲な怪物】の一族を制圧しました。彼は竜を殺害して用心深い両目を閉ざし、果樹園から黄金の戦利品【林檎】を持ち去りました。彼は三つの舌を持つ地獄の怪物【ケルベロス】を門から追い立て、身震いしながら、地上へと引きずり出しました。彼は激怒してトラキアのペストを殺害し、串刺しにされた彼の手足を自らの駿馬に投げ込みました。人間の死骸を食らう不吉な鳥、頭を切られても増え続ける火を噴くヒュドラ【九つの頭を持ったウミヘビ】、その順番で、彼の剣によって死にました。彼は母なる大地に素姓を鼻にかける巨人アンテウスを叩きのめし殺害しました。彼は激怒し、強く柄を持って、泡を吹く猪から剛毛質の皮を裂きました。この世が始まって以来、人類史上最も立派な人物と定評のある彼は世界からそれぞれ恐ろしい怪物どもを一掃し、世界の果てまで名声を広げ、あらゆる国々で崇められました。広大な自然界の最果てに打ち建てられた彼自身の二本の柱だけがここと境界を成すことができま

した。

悲嘆に暮れるディアネイラ【ヘラクレスの妻】は、無視されて冷めた愛の報いを試すよう神によって運命づけられ、彼に毒の塗られた衣服を贈り、もう一度冷めた愛情を元に戻そうとしました。しかし、恐ろしい贈り物は縒りを戻すには相応しくなく、直ちに、若者を狂乱状態へと追いやりました。彼の近くで燃え立ち、いつものように生け贄の血を飲むよう準備された大きな柱の上へ、（彼の脳は途方もなく苦痛にかき乱されて、）彼は猛烈な勢いで飛び跳ね、炎のなかで息絶えました。

このように偉大なアルキデース、自然の女神の誇りは亡くなりました。それゆえ、誰が運命の女神を信用することができましょうか。彼女の寵児は、人生半ばにして阻まれて、不安定な車輪から再び転落の憂き目に会いました。彼女の策略に注意して下さい。彼女の卑劣な術策に用心して下さい。というのも、しばしば人間の世話を一切ほっぽり出して、思いもよらない時に、彼女は狡猾な罠を張り巡らすからです。

ネブカドネザル

堂々としたバビロン【古代バビロニアの首都】よ、如何なる力強い言葉がお前の煌びやかな威厳を語ることができるというのか。一体誰がおまえの煌びやかな王位の輝きと王座に附随する壮大な輝きを物語ることができるというのか。二度、お前の傲慢な王は意気揚々とヨルダン川近くに進軍して征服しました。イスラエルの王族のなかで最も美しい息子たちは、（侮辱的にも勝利者の征服を彩るように運命づけられて、）大いに愛されたサレム【現在のエルサレムの古代名】の神聖な地から、不運な流人として暴君の宮廷に連れ去られました。このなかに、あまねく名声があった戦争の不運な若者、聖ダニエル【ユダヤの預言者】がいました。カルデアの得意げな預言者たちのなかには、王の夢を解明できる者など誰もいなかったので、神の的確な真実に示唆されて、命じられるままに、彼は謎めいたそれぞれの意味を明らかにしました。

異教への屈辱的な畏怖に駆られて、王は集められた手先どもに巨大な像を造るよう命じました。直ちに伝令官たちは、広大な帝国のなかで生命を保つのに必要な空気を吸い込む老いも若きも男も女も、忠実な民衆に対して、平伏して敬意を払い、巨大な偶像の前で頭を下げるようにと声高に命じました。その命令を拒んだならば、分別を無くした者として、かまどの炎のなかで頑迷な愚かさを償うことになりました。イスラエルの息子たちは、そんな恐ろしい脅しを物ともしないで、度々祖先に差し出された救いの手を信じ、怯むことなく燃え盛る炎のなかを歩きましたが、傷つけられることはありませんでした。というのも、如何なる力が神を信じる者に損傷を与えることができるでしょうか。

王の心は財宝に喜び、傲慢さで膨らんで、天と地の力に公然と反抗し、遂に、森に住む動物の姿で草の葉や根を食べるように強いられました。長い年月を経て、この傲慢な王は、王もまた災難を経験するよう運命づけられていることを知るようになりました。身体が変形して、ゆったり垂れた

頭髪は鷲の羽毛のように腰まで伸び、手は羽の綿毛で覆われ、鳥のような鉤爪が生えているのを彼は見ました。このように哀れな姿で過ごしていましたが、遂に、神の公正なおきてに定められた歳月が満了し、彼の魂は暖かい愛情と不屈の熱意に包まれて、神のもとへ昇天しました。

ベルシャザル

父の不面目さからまだ十分に学んでいなかったので、彼の子孫は、傲慢さによる露骨な冒涜のかどで、厳しく罰せられました。ベルシャザルが跡を継ぎ、不誠実な彼は最も卑しい偶像に心を託しました。彼は大いに重んじられて自惚れていましたが、直ぐに、神の正義の手によって彼の傲慢さは罰せられ、王座から転落しました。

ある日、彼はカルデアの諸侯を宴会に招きました。ご馳走を並べ立て、力を誇示して、奴隷を数えながら、ちやほやされて暴君は席に着くと、嬉しそうな口調で命じました。「直ぐに貴重な聖器を持ってこい。父の軍勢がユダ【パレスチナの古王国】の王を倒して征服した際、彼の飽くなき熱意によって勝ち得た戦利品を。なみなみと注がれた葡萄酒をカルデアの倅どもが崇める偉大な神々に捧げようぞ。」

そこで、王と彼の興奮した臣下たちは、昂揚して、宴会をさらに盛り上げました。かつては神聖な神殿に奉納されていた聖器は、今では騒々しく浮かれ騒ぐ宴会で、相応しくない輩どもの手によって扱われ、ふしだらな娼婦の唇によってさえ汚されました。再三、度が過ぎるほど飲み干していると、突然の喚起に肝をつぶして、王は戦慄の眼で壁を見ました。そこには不可解な手が自ら動いて有名な言葉を刻みました。広大なカルデアの領地内で壁に刻まれた謎めいた文字を解き明かすことのできる者など誰もいませんでした。遂に、王妃はユダヤ人の捕虜、聖ダニエルを捜して王のもとへ連れてきました。彼はこのように告げました。「おお、王様、あなたの父のこの上ない偉大さは十二分に知られています。神は気前よく彼に財宝、帝国、名誉をふんだんにお与えになりました。しかし、傲慢さから恵み深い神の意向を無にし、神の恵みを台無しにしました。このため、（神慮のままに）王座を剥奪され、素敵な人間界から追い出されて動物の姿にさえ変えられ、淋しい森のなかを彷徨（さまよ）いました。彼は森の住人のなかで惨めな浮浪者として、心許ない貧相な食べ物を集めるよう強いられて、長い間暮らしていました。遂に、心を鍛えた彼に神は親切にも憐れみをかけて下さいました。彼はもう一度元の状態に戻されると、改悛の意を示して、神聖なる天の王を崇めました。恐ろしい傲慢さがあなたの父を痛烈に災難へと導いたけれど、あなたも常に同じような歩（ほ）を進めています。あなたの反抗的な心は、神の敵である、意味のない石材から造られた下劣な偶像だけに頭を下げています。あなた自身、淫らな一行のなかで、大胆にも神殿にあった神聖な器を汚し、神をも敬わないあなたの唇は恐れ多い神の力を嘲り、正義の復讐を行う神の力に大胆にも挑みました。このように手が自ら動いて壁に文字を刻んだのは罪を犯された神の命令によるものでした。その言葉はこのような恐ろしい運命の前兆です―おお、王よ、あなたの帝

国は直ぐに終焉に至ります。」

その夜、ベルシャザルは、敵のペルシア人の鋭い剣によって殺害され、命運がつきました。このように運命の女神は好意を寄せた者を直ぐに見捨て、その者から財宝、名声、友を奪い去ります。

ゼノビア

ペルシアの王の血筋で、ゼノビア【古代パルミラの女王（二六七？―二七二）】は世界中で賞賛されました。教養で洗練され、勝利の栄冠を勝ち得て、学芸でも武芸でも名を馳せていました。

幼少の頃から男勝りの彼女は比較的楽な女性の務めをやめて、女狩猟家の一行に加わって森へ出かけるのが好きで、足の速さにおいては、弾むように逃げる雌鹿と張り合いました。そして、狙いを付け、震えて息を切らした鹿の心臓めがけて血に染まった槍を投げ込みました。十分に成長すると、力強い腕で怒り狂った猪から剛毛質の皮を引き剥がし、豹や獅子を大の字に伸して、森を血で染めました。このような労を厭うことなどありませんでした。しばしば山の頂を夜通し駆け回り、新たに落ちた露を踏みつけて、没頭して、大胆にも獲物を追い求めました。時には野宿しても落ち着いて眠りました。彼女は強靱な身体をがっしりと組み合わせる競技の覇者で、どんな力自慢であれ、どんな年齢層の者であれ、格闘競技において彼女と敢えて競う者など誰もいませんでした。

長い間、彼女は申し込まれた婚姻の束縛を蔑んで、純潔を守っていました。遂に、オデナトゥスが親切な彼女に求婚すると、彼女は彼を結婚上での主人として受け入れました。仲違いから彼らの日々が悩まされることは決してなく、汚れのない甘い愛によって幸せな結婚は神の恵みを受けました。

戦地での戦いにおいて、彼女は誰に対しても屈することなく、また、謹直に知識の獲得を楽しみ、冷静沈着に非常に有益な話をして時間を費やしました。彼女は狩猟が大好きでしたが、教養のある人間形成のため、その品のない楽しみを進んでやめました。彼女は王座に就いた君主に威厳を保たせる派手な衣装を見下すことはありませんでした。彼女の玉座はアジアの純度の高い宝石で覆われ、彼女の豪華な帯は赤々と輝きを放っていました。彼女が勇敢な軍勢を率いるところは何処でも、勝利で彼らの苦労は報われ、彼女の軍勢は抵抗されずに東方諸国を一掃して征服し、彼女の名声はローマからの眩い戦利品を増やしました。彼女は怯むことなく如何なる種々の労苦に従事したのか、どんな王を征服したのか、どんな戦（いくさ）を行ったのか、最後に如何なる災難が女王に降りかかったのかについては、流暢な韻文でペトラルカ【イタリアの詩人（一三〇四―七四）】に語らせておきましょう。

勇敢で誉れ高い夫が天に召された時、彼女はかなりの兵力で国を支配し、自らの軍の支えだけで輝きを増して際立っていました。だから何度も彼女は戦場を山積みされた死体で一杯にしました。激しく猛威をふるって敵を追撃するので、諸侯は彼女に慈悲を請い、もし傷つけられずに彼女の殺人

剣を逃れたならば、幸いなことでした。エジプト人は迅速に奔走する彼女に出会して恐怖に戦いていた時、彼女は構えた剣を決して抜こうとはしませんでした。彼女に対してシリアの諸侯は憎しみを剥き出しにしましたが、恐怖に怖気づいて勢いを自制しました。アラビアの勇敢な諸侯は、彼女の威嚇に恐れをなして、ただ泣き言をいうだけでした。彼女はローマ軍の勇猛果敢な驀進を食い止め、世界の名だたる王侯に彼女の軍の力を知らしめました。しかし、ああ！運命の最も精選された甘味に少量の最も苦い胆汁が混ぜられているのがしばしば見出されます。このようにしてこの名高い女王は遂に（日光の輝きが翳り）不幸の暗闇へと投げ込まれました。

運命の女神が遂に長く愛した寵児を見捨てたので、彼女は敵に敗れました。戦場から混乱して追い散らされ、一目散に逃げていく彼女の軍勢は獰猛なアウレリアヌス【ローマ皇帝（二七〇―二七五）】に敗北しました。そして（さらに悲惨なことですが、）彼女自身、苛酷な運命に強いられて、惨めな捕虜として、ローマへと連れて行かれました。そこでは栄光を失った冠が彼女の頭に被せられ、痛烈に嬲られました。ああ、もはや彼女のものはありません。両腕と溜息で膨らんだ胸には金で覆われた鎖がかけられています。彼女の災難は明白です。

ネロ

宿命の三女神は悪魔のようなネロ【ローマの皇帝（五四―六八）】に親切な思いやりという美徳ではなく、品のない眼差しで欲求が満たされずに絶え間なく切望する利己的な才能をお与えになりました。彼の帝国は世界の果てまで広がり、あらゆる国は彼の支配下に平伏しました。それぞれの地域は様々な蓄積から豊富な貢ぎ物を献上することを誇りました。彼の煌びやかな衣装は、鮮やかな光沢に包まれて、東方諸国から略奪した戦利品の宝石で眩いばかりでした。眩い光を放つダイヤモンドや柔らかな色合いのサファイアが天空の鮮やかな青の生地で織られた衣装に鏤められていました。このほかに、まあまあの真珠や鮮やかな緑色のエメラルドが見られました。だが、光沢のある宝石が集められて、物凄い悪事に染まり、地獄の小悪魔の復讐の女神たちが取り憑いた、あの胸で美しく煌めいても虚しいものでした。悪意に満ちた怪物は、広々と荒廃させる炎が立派なローマを壊滅させるのを、激しい快感を持って眺めていました。心から絞り出された苦悩の叫びは忌々しい彼の耳には、心地よい音のように、安らぎを与えました。彼は人間の面汚しとして生まれ、前代未聞の傲慢さで、あらゆる忌まわしい悪行で秀でようとしました。そして、自然の理法も人間が作った慣習も無視しました。（恐ろしい行為ですが、）妹さえ彼の獰猛な近親相姦の情欲を押さえる力はありませんでした。母の愛情のこもった涙も彼の親不孝の手に殺人という憎むべき疵を止めさせることはできませんでした。

彼はまずまずの教養を身に付け、感受性の強い性格に形成され、天真爛漫さと誠実さの恩恵を受け、長い間、徳目の純潔なおきてを遵奉し、博学な教師【セネカ】の労苦に報いました。それから、彼の思いやりのある心

には謝意を表す気持ちが高まり、恩義を受けたすべての人に敬意を払い、師と目が合えば、礼儀をわきまえて起立したものでした。しかし、人生での目が眩むほどの成功で、直ぐに彼は一変し、徳によって自らを抑えようとすることを止めました。それからは、師をもはや尊敬の眼差しで見ることはなく、ひどく憎んで師を悩ませ、遂には自らの手を師の血で染めました。

しかし、運命の女神が庇護する手を引っ込めると、数え切れない不運が素早く彼を悩ませました。狂気じみた叫び声をあげて、憤慨したローマ市民、負傷した人々と敵の軍勢が蜂起すると、暴君は恐怖の念に駆られて、どうしようもなくなり、逃げました。彼は振り向くと、物凄い罵声を浴びせて天空を恐れさせる民衆の叫び声を聞きました。彼はさらに高まる恐怖にぞっとして尻込みし、身を隠せる家も見出せません。彼は涙を流して、哀れんでくれる味方に己の苦しむ胸に深く剣を突き刺すように懇願しましたが、無駄でした。全人類の不幸のもと、災いのもと、物笑いの種である彼は、哀れまれることなく、自ら命を絶ちました。

ホロフェルネス

古代ペルシア王の最初の偉大な太守、ホロフェルネス【ネブカドネザル軍を率いたアッシリアの将軍】は広大な東方諸国中に知られていました。反乱を起こしたイスラエルの民族を懲らすように派遣された彼を一人の女性が差し迫る恥辱のなかでやっつけました。ユデト【古代ユダヤの寡婦】は、愛国心に燃えて、彼女の国を敵から救おうと熱望しました。味方を装って敵陣に行き、指揮官に嘘の話を伝えました。その話は彼女の愛嬌のある色香で引き立ち、指揮官はいつもの慎重さを欠いてしまいました。彼の天幕のなかに難なく受け入れられ、勇気ある乙女は、彼が無防備に眠っている間に、太守の首を打ち落として、ベトリアへの恐怖の種を取り除き、その酒臭い首（戦利品）を持って無事に脱出しました。

アンティオコス

嘗てペルシアの誇りで、最後は恥曝しとなった、名高いアンティオコスよ、あなたの名は卓越した行動を取られたことで世界中に知られ、名声、壮麗さ、名誉、帝国はすべてあなた自身のものになりました。運命の女神の順風によって高く昇り、遠大な望みは天に触れるほどでした。成功に酔いしれて、高慢で大胆なあなたは、強力な軍なら自然の理法を統制でき、山も潰して平地に変えることができ、逆巻く海さえ抑制できると思っていました。たびたび、傲慢さから思い上がり、憤然として、狂乱状態に陥ると、あなたは神の雷をも物ともしませんでした。属国を軽蔑して見下し、神自らの民に憎しみを据えて迫害しました。あなたの軍勢が、波乱に富んだ戦地において、忌々しいイスラエルの民に屈するよう強いられたことを悔しがり、あなたは強大な軍勢を編成して、サレムの要塞への進行を計画しました。

しかし、神に阻まれて、あなたの高ぶった憤怒は弱まり、憂いに沈むあ

なたの思いは、近くで介護してもらうことでした。恐ろしい病気の餌食となり、（ほんの少し前まで食い止めることのできない洪水のように流れ、眼に復讐の炎で燃えるよう悟らせた）あなたの血は、ひどく悪臭を放ち、今では微かに流れていると感じられる程度でした。彼から無数の腐敗が発生し、損傷が広がり、内臓も蝕まれました。影響を及ぼすどんな呪文もあなたの悪臭を止めることができず、誰もあなたの近くにとどまることもできず、あなたは殆ど一人で耐えるしかほかにありませんでした。ご覧下さい。不幸な王は臣下のもとから急いで離れ、寂しい山のなかで、独りぼっちで亡くなりました。

アレクサンダー

世界が大いに恐れた人物、マケドニアの誇りであったフィリッポス【マケドニアの王（紀元前三五九―三三六）】の素晴らしい息子について聞いたことのない者などいるでしょうか。彼は確かめられていない国へ、これまで知られていない国へ大胆な翼を広げて舞い上がるよう征服された者どもに命じました。遂に、彼は世界の最果てまでも直ぐに獲得し、征服されていないところがないことを嘆き悲しみました。彼は世界を制覇したのでした。しかし、ああ！箍（たが）がはずれた情熱の荒れ狂ううねりに翻弄されて、彼は己を見失いました。半狂乱を誘う葡萄酒の喜びと淫らな愛の炎が彼の栄冠を常に台無しにし、彼の名声を霞（かす）ませました。一時的に華々しかった彼が殺されたのはかなりすぐのことでした。十二年という短い間、彼は驀進を促し、その時、国々が戦で同盟を結んで攻撃しても無駄だった、あの腕にひどい毒の力が回ったのでした。

ジュリアス・シーザー

卑しい身分から帝国の頂点へとシーザー【ローマの将軍・政治家（紀元前一〇〇―四四）】は妬まれながら昇りました。鋭い剣で東方諸国を征服したポンペイウス【ローマの軍人・政治家（紀元前一〇六―四八）】も若き同僚の強大な力を認めました。だが、栄華は短く束の間でした。シーザー自身、直ぐに、運命の女神の力の脆さを感じました。東方諸国を征服し、ポンペイウスはもはやいませんが、ファルサリア【古代ギリシアのファルサロスを中心とした地域】での勝利をシーザーはローマにもたらしました。しかし、ローマの愛国者どもは、名声を他の者と分かち合わない者をよしとしないで、太陽が衝撃的な行動を見ていても、奴隷というひどい束縛から国を解放し世界を征服したシーザーに突進して、彼らの復讐の刃を彼の血で染めました。突き刺されて無数の傷を負いながらも、なお平然として、気が遠くなりながら英雄は穏やかに辺りを見回し、自らの死を自覚して、品格と誇りを持って、落ちた外衣を手繰り寄せ、剥き出しになった手足を隠しました。生きざまと同様に、彼の最期も見事なものでした。

クロイソス

運命の女神は名高いクロイソス【リディア最後の王（紀元前五六〇―

五四六)】に尽きることのない蓄えから多量の水を注がれましたが、この水によって泰平が保証されることはなかったし、恐ろしい冒険から王の身を守ることさえありませんでした。突然の軍勢によって散り散りにされ、荒れ狂う炎のなかで、最も激しい苦痛を受けて、死ぬよう運命づけられていました。その時、突然、そら！空が高らかに轟き、はち切れんばかりの雲が垂れこめて、土砂降りになり、荒れ狂う炎は洪水に制圧されて消え、天のご慈悲で彼は難を逃れました。このような危難で彼の猛威が抑えられるはずはありません。再び直ぐに彼は災難をもたらす戦をしきりに望みました。一度神によって救われたので、根拠もないのに、如何なる人間の敵も彼を倒すことは決してできないと思いました。

ある夜、彼は、高いところに吊されているかのように、枝が天に触れるほどの大きな樹の上で、天帝ジュピター自らが召使いの奴隷となり、天の水で自らの手足を洗って下さり、この後、太陽の神【ポイボス】が入念に彼の美肌を擦って暖め、滴の垂れる髪を乾かしてくださる夢を見ました。目が覚めると、一段と誇らしさで胸が一杯になり、喜んで娘に夢の内容を語り、賢い娘にそれぞれのおもねるような素振りを考慮して、直ぐに夢のお告げを言い当てるようにと命じました。

従順な娘は悲しそうな声で答えました。「私が悲しい説明をしないで済むならばと思います。しかし、おお、お父様、前もって警告を受けた私の両目には、枝を広げた樹に死を招く絞首台が見えます。従って、あなたの身体は吊されたままで、ジュピターによって身体が洗われるのではなく、降り注ぐ雨でびしょ濡れになるのです。そして、陽気なポイボスが明るく輝いて、その光線で身体を乾かすので、あなたの手足は白く見えることでしょう。」

先見の明がある娘は真相を見事に解き明かし、直ぐに王はそのとおりの運命を辿りました。彼の玉座も財宝の山も彼を救うことはできず、悲惨な最期を遂げるよう運命づけられ、墓さえも拒まれました。このように気紛れな運命の女神はしばしば高慢な者を襲撃し、彼女の顔を雨模様の雲で隠します。

スペイン王ペドロ

悲嘆を表す言葉で物語るのは悲しいものです。ペドロは如何なる悲惨な死を遂げたのか。スペインの誇りであったペドロは、弟によってさえ、妬みの眼差しで見られました。彼の弟は、長い間、憎悪による抜け目のない奸策で獲物（兄）を追い求め、王国から彼を追い払いました。多くの戦地で深手を負わされながらも、怯むことなく、彼は依然として降伏を拒絶しました。だが、波乱に富む戦争の恐怖がなくなると、遂に卑劣な策略のほうが勝りました。彼は、裏切られて、弟の天幕に引き立てられ、弟の手にかかって殺害されました。

キプロス王ペドロ

キプロスのペドロよ、アレクサンドリア【エジプト北部の市・港町】が

陥落した時、あなたの不朽の名声は増大して世界の最果てまで知られ、無類の偉業のために、あなたの勇敢な同僚よりも光彩を放っていました。だが、あなた自身の臣下どもはあなたの名声を高めたその偉業に妬みの眼差しを向けました。あなたの立派さに我慢できず、彼らは卑劣な命令によって、殺人者の両手にさえ、あなたの命を奪うように懇願しました。

ベルナボ・ヴィスコンティ

名声の女神によって勇敢で高貴な者たちに授けられる報酬があなたに与えられないことなどないでしょう。ミラノの大いなる誇り、ベルナボよ、ロンバルディア【イタリア北部の州】での災難があなたの偉業をはっきりと示しています。だが、これが牢獄に入れられたあなたの命を保証することはできませんでした。あなた自身の家系でさえあなたの名声を支えることはできませんでした。血縁でのように、愛情の絆であなたと固く結ばれた者が、悲しい奴隷の境遇に陥ったあなたに自らの栄華を嘆かせ、それから希望の光も見えないあなたに観念するよう迫りました。

ピサのウゴリーノ伯

ウゴリーノに降りかかった前代未聞の不運な災難を物語ろうと努力しても、庇護者以外のどんな舌が物語れるというのか。

ピサの外壁から遠くないところに、古めかしいゴツゴツとした高い塔がぽつんと見られました。この塔のなかに、ウゴリーノは長い間無頼の徒党によって監禁されて、捕虜の身の上に耐えていました。彼と一緒に三人の幼い子供たちも入れられ、年長の子供はまだ五歳にも達していませんでした。ああ、可愛らしい小鳥たちをそのような鳥籠に閉じ込めるとは何と残酷なことでしょうか。

ある夜、無情な看守がその塔に僅かな粗食を運ぶことになっていた予定の時間に、突然、彼の耳に轟音をたてて大きく反響するような異常な音が聞こえました。扉が二度と開かないように閉ざされてしまったのでした。

恐ろしい思いを心の奥底で認識すると、瞼に激しい苦悩による涙が流れ出ました。だが、彼は一言も言いませんでした。しかし、観察力の鋭い子供の目は不穏な空気に直ぐに気づきます。年中の息子は、不安の前兆に慣れていなかったけれど、父の目から滴り落ちる涙を見ると、ただ不運を示そうと自らの意識を喚起して、このようにか細い声で震えながら言いました。

「ねえ、お父さん、どうして泣くの。看守が職務怠慢だから涙を流しているの。最愛の子供たちがひどく腹を空かしているのに、安心させる一口分もあなたの優しい心が与えることができないからなの。おお、たとえ僅かであっても、ほんの少しでもあれば、私の空腹の苦しみを和らげるために下さい。」このように毎日年中の息子は父に懇願しましたが、遂に、食事が貰えないので窶(やつ)れて、もはや泣き言を言う元気もなくなりました。彼は願いが聞きとどけてもらえないと分かると、「さようなら」と言って父に口づけし、死にました。

その光景に心が揺さぶられて、逆上した父の胸は計り知れない怒りの気持ちで一杯でした。悲しみのあまり、自らの歯で痩せこけた両腕を裂いて傷つけたので、彼の両腕は流れ出た血で変色しました。二人の息子たちは悲しみによる逆上だとは思わないで、空腹のために父は両腕を貪(むさぼ)るように食ったのだと思い、そこで言いました。「お父さん、私たちの肉を食べて、あなたのひどい空腹感を和らげて下さい。お父様が最初にそれを与えて下さいました。それゆえ、何故あなたは自らの権利を正当に受け取るのに焦(じ)れるのですか。」これが二人の発した最後の言葉でした。というのも、彼は直ぐに食べ物が貰えないことで二人が衰弱して、元気なく、身を屈(かが)めているのを見たからでした。自然の女神はそのような痛切な悲しみに長く耐えることはできませんでした。そして死神も直ぐに不幸な父親を安らかな眠りにつかせました。このような悲しい身の上話の詳細を読みたい方はダンテの不朽の書物【『新曲』、地獄篇、第三十三歌】を参照して下さい。

注一　Betsy Bowden (ed.), *Eighteenth-Century Modernizations from the Canterbury Tales* (D.S. Brewer, 1991).

注二　運命の寓意研究に関しては、拙稿「Lydgate の Fortune 描写—直喩表現 "lich an aungel bright"」、鹿児島県立短期大学『人文』第13号（1989）、1—6；「『王侯の没落』における Fortune の中世的寓意と彼女の呼称 'goddesse' の意義—原典との比較研究の観点から—」、鹿児島県立短期大学『人文』第26号（2002）、1—15を参照。運命の彩飾画研究に関しては、轟義昭『中世ヨーロッパ写本における運命の女神図像集：補遺』（成美堂、2000年）を参照。

注三　G. チョーサー『カンタベリ物語』（下）（西脇順三郎訳、筑摩書房、1987）、pp.173—201。

注四　G. チョーサー『完訳カンタベリー物語』（下）（桝井迪夫訳、岩波文庫、1995）、pp.7—47。

注五　誓言、愛用句、きまり文句は桝井迪夫訳（岩波文庫）によるものである。

注六　（　）のなかの数字は *The Riverside Chaucer* (ed. L.D. Benson) のテクストの行数を表す。以下、チョーサーの「修道僧の物語」からの引用はすべてこの版により、本文中に行数のみ記す。

注七　（　）のなかの数字は *Eighteenth-Century Modernizations from the Canterbury Tales* のテクストの行数を表す。以下、リップスコムによる近代化版「修道僧の物語」からの引用はすべてこの版により、本文中に行数のみ記す。

（平成二十年五月七日　受理）